

# 宮崎県の野イチゴ

齊藤 政美 (宮崎植物研究会)

## はじめに

冬の果物として愛されるイチゴ、皆さん方もお好きなことでしょう。この栽培イチゴの正式な名前はオランダイチゴです。オランダの農園で作られた品種のようです。このオランダイチゴの属名はオランダイチゴ属です。日本に自生するオランダイチゴ属のイチゴにはノウゴウイチゴ、シロバナノヘビイチゴなど数種類があるようですが、残念ながら宮崎県にはオランダイチゴ属のイチゴは自生していません。ちょっとがっかりですね。

では、本県で見られるイチゴは何属なんのでしょうか。私たちが口にする野イチゴはすべてキイチゴ属です。オランダイチゴ属は草でトゲがありませんが、キイチゴ属は低木でトゲがあるのが特徴です。実は赤色やら黄色やらいろんな種類がありますね。本県にはいったい何種類くらいあると思いますか。結構たくさんあるんですよ。それではそれらをアイウエオ順に紹介していきたいと思えます。なお、野イチゴ類はときに雑種もつくりませんが、今回は雑種については触れません。

## 1 エビガライチゴ *Rubus phoenicolasius* Maxim.



やや大型の半つる植物です。写真では分かりにくいかもしれませんが、茎や葉柄、がくなどに赤いトゲ状の毛を密生します。葉はふつう三つ葉です。葉の裏は真っ白で、ウラジロイチゴの別名もあります。県内の各地に生えていますが、数は少ないです。花は7月に咲き、8月には写真のように熟れます。果実に出会える機会は少ないので、私

は味見をしたことはありません。

## 2 オオバライチゴ *Rubus croceacanthus* H.Lév.



やや大型の半つる植物です。葉は通常5枚の小葉からなります。茎や葉には鉤状のトゲをつけます。暖地性のイチゴでリュウキュウイチゴの別名もあります。県内では沿岸部でよく見られます。背丈ほどの高さで、葉が5枚だったら本種です。花は白色で3~4月に咲きますが、直径が3cmくらいと大きいのも特徴の一つです。

## 3 オオフユイチゴ *Rubus pseudosieboldii* Makino



これまでの2種に比べて、葉が1枚で丸いのが特徴です。茎は地面を這います。後述するフユイチゴによく似ているので識別は難しいです。フユイチゴよりも葉が厚くてより丸いので慣れると識別できるようになります。葉裏の脈上にトゲがあるのも本種の特徴の一つです。花期は夏ですが、花はあまり目立ちません。

#### 4 キビノナワシロイチゴ *Rubus yoshinoi* Koidz.



中型の半つる植物です。花はピンク色でクロイチゴやナワシロイチゴに似ますが、小葉は大きく先が細長くとがるので全然似ていません。本種は全国的にもまれな種で、本県では県北の1か所で見つかっていません。キビは吉備で、現在の岡山県で最初に見つかったのかもしれませんが。残念ながら、この果実の画像は持っていませんでした。

#### 5 クサイチゴ *Rubus hirsutus* Thunb.



県内で、どこでも普通に見られる野イチゴの一つです。高さはあまり高くなく、膝くらいが一般的です。茎や枝には短い毛が密生します。葉は一般的に3枚ですが、小葉は幅広く丸っこいので識別は簡単です。開花は野イチゴの中では最も早く、3月上旬には咲き始めます。花は白色で、直径が3~4cmと大きく目立ちます。果実は直径が1cm以上と県内の野イチゴでは最大で、またおいしいです。食べるときは果実の中にアリがいることが多いので気を付けてください。まあ、食べてもどうもありませんが。県内にはアカイチゴやツチイチゴなどの方言があります。

#### 6 クマイチゴ *Rubus crataegifolius* Bunge



県内最大級の大型のイチゴです。高さは人の背丈ほどになり、枝も多く出ます。株全体に鉤状のトゲを密生します。そのようなことからクマ(熊)の名がつけられたのでしょうか。葉は1枚ですが、ややモミジ状に切れ込みます。花期は4月ですが、株が大きいので結構長く咲きます。県内の荒地などで普通に見られます。実は食べられますが、私的にはそんなにおいしくはありません。県内ではタカイチゴの方言が一般的ですが、ウシイチゴと呼ぶ地域もあります。

#### 7 クロイチゴ *Rubus mesogaeus* Focke



やや大型の半つる植物です。温帯性のイチゴで、県内では北西部において極めてまれに見られます。前出のエビガライチゴにやや似ていますが、赤いトゲ状の長毛を密生しないので簡単に区別できます。果実は球形で、赤色を経て黒色になるのでこの名がついたのでしょうか。花期は初夏で、ピンク色のかわいい花をつけます。

#### 8 コジキイチゴ *Rubus sumatranus* Miq.

中型の低木で、茎は傾斜します。小葉は5~7枚



でオオバライチゴに似ますが、花は小さく、果実は黄色く熟します。また、茎にはトゲ状の毛を密生します。コジキイチゴは県北や県西などでまれに見られるイチゴです。コジキは乞食ではなく、土器の調理用具であるコシキ（甗）が語源という説があります。

#### 9 コバノフユイチゴ *Rubus pectinellus* Maxim.



後述のフユイチゴに似て葉が丸く、葉が小さいのでこの名があります。この写真はそうではありませんが、葉の中心部が赤くなることが多く、フユイチゴと見間違ふことはありません。県北や県西の標高の高い所で見られますが、近年はシカの食害のせい次第に姿を消し、今はめったに見られなくなりました。

#### 10 ナガバモミジイチゴ *Rubus palmatus* Thunb.

中型の低木です。東日本に見られるモミジイチゴに対し、西日本のものは葉が長いのでこの名があります。最近出た図鑑では区別していません。葉は1枚で、名前のおりややモミジ状になります。県内で普通に見られる野イチゴの一つです。3~4



月に直径1cmほどの白い花を、葉の下に隠れるように咲かせます。果実は黄色く熟れ、とてもおいしいです。食べたことのある人も多いのではないのでしょうか。この実でジャムを作る人もいます。県内ではキイチゴの名が一般的で、アワイチゴと呼ぶところもあります。キイチゴは木苺よりも黄苺の意味合いが強いのと思います。

#### 11 ナワシロイチゴ *Rubus parvifolius* L.



中型の野イチゴで、地面を這うように生育します。葉は一般的に3枚で、小葉は丸いです。葉の裏は白色です。これも県内では普通に見られる種類です。道端などで普通に見かけます。花期は4~5月で、ピンク色のかわいい花をたくさんつけます。果実は赤黒く熟しますが、そんなにおいしいはありません。苗代をつくるところに熟すのでこの名がついたのでしょうか。方言は地域によってまちまちですが、西諸地方ではセキリイチゴと呼ばれています。

#### 12 ニガイイチゴ *Rubus microphyllus* L.f.



中型の野イチゴですが、県内ではあまり大きなものは見ません。県内では県北や県西の標高の高い所でまれに見られます。葉は1枚で少しモミジ状になります。結構トゲが目立ちます。花は5月に咲きますが、白い花は小さくてあまり目立ちません。ゴマ状の種子が苦いのでこの名があるといわれています。私は食べたことはありません。

### 13 ハスノハイチゴ *Rubus peltatus* Maxim.



やや大型の野イチゴで、茎は傾斜します。葉は1枚でモミジ状ですが、葉柄がハス状につくのでこの名があります。県北のごく一部の山だけに生育していますが、シカの食害で絶滅の危機に瀕しています。今は保護のために張られたネットの中で細々と生きています。ネットの中のものは大きく成長し、花や実をつけるまでになっています。花期は5~6月で、果実は珍しく白色に熟します。

### 14 ハチジョウイチゴ *Rubus ribisoideus* Matsum.

大型の野イチゴで、海岸付近に生えます。葉は1枚でモミジ状です。茎や葉にビロード状の毛を密生し、トゲが少ないのが特徴です。花期は3~4月



で、白い大きな花をつけます。図鑑を見ると果実は黄色でナガバモミジイチゴに似ているようですが、私はまだ見たことがありません。それで、花の写真を載せます。ハチジョウの名は八丈島に由来します。

### 15 バライチゴ *Rubus illecebrosus* Focke



やや小型の野イチゴで、県北や県西の標高の高いところに生えます。小葉の数は多く、3~7枚です。似たものにヒメバライチゴがありますが、ヒメバライチゴは平地でよく見られること、ヒメバライチゴには植物体に腺（粘る小さな点）がありますが、バライチゴには腺がないことで見分けられます。名前の由来は、茎葉がバラのようにトゲが多いからと言われています。花は7~8月に咲きますが、バラには似ていません。

### 16 ヒメバライチゴ

*Rubus minusculus* H.Lév. et Vaniot

やや小型の野イチゴです。県内各地で普通に見られます。葉はバライチゴと同じように5~7枚ですが、バライチゴより小さいです。バライチゴは



全体が無毛ですが、ヒメバライチゴは軟毛に覆われているのも識別点です。また、ヒメバライチゴの花期は4月と早く、5月には果実が熟します。

### 17 ビロードイチゴ *Rubus corchorifolius* L.f.



中型の野イチゴです。植物全体、特に葉にビロード状の毛が密生することからこの名があります。えびの市や小林市ではよく見かけますが、そのほかの地域では見たことがありません。葉は細長くあまりモミジ状になりません。若い葉が赤みを帯びるのも特徴の一つです。花期は4月で、花は白色で小さいです。

### 18 フユイチゴ *Rubus buergeri* Miq.



県内でどこでも普通に見られる野イチゴで、茎は地面を這います。葉は丸く、ほとんどの方が見たことがあるのではないのでしょうか。しかし、似たものにコバノフユイチゴ、オオフユイチゴ、ミヤマフユイチゴがありますのでご注意ください。花期は8~9月で、冬に熟するのでこの名があります。県内ではヤマイチゴやカンイチゴの名で呼ばれています。

### 19 ホウロクイチゴ *Rubus sieboldii* Blume



大型の野イチゴでよく群落を作ります。葉は円形で厚くて硬く、直径は最大20cmにもなり野イチゴでは最大です。県内では沿岸部で多く見られます。花期は4月で、白く割と大きな花を咲かせますが、葉に隠れてしまうので、あまり人目に触れません。ホウロクとはゴマなどを炒るホウロク鍋（焙烙鍋）のことで、果実を逆さにした形がそれに似ているそうです。

### 20 ミヤマフユイチゴ

*Rubus hakonensis* Franch. et Sav.



ミヤマは深山のことで、名前のとおり県北や県西の標高の高いところで見られます。フユイチゴ

は茎に多くの毛があるのに対し、ミヤマフユイチゴには毛がありません。また、フユイチゴは葉が卵円形で葉先があまりとがらないのに対し、ミヤマフユイチゴは葉がやや細く、葉先がとがり気味です。花期はフユイチゴとほぼ同じです。

## 21 その他のイチゴ

今まで県内に産するキイチゴ属の植物について書いてきましたが、県内にはそれ以外にもイチゴの名のついた植物がありますので、最後にそれを紹介したいと思います。

### (1) ヘビイチゴ

*Potentilla hebiichigo* Yonek. et H.Ohashi



県内で普通に見られる植物で、ご存知の方も多いことでしょう。これまでヘビイチゴ属とされていましたが、最近キジムシロ属に編入されました。両属とも草でトゲがなく、キイチゴ属とは区別されています。ヘビイチゴも一見イチゴに似ていますが、果実が液質でなく、おそらくおいしくないと思います。そのため、ヘビが食べるイチゴとなったのでしょうか。

### (2) ヤブヘビイチゴ

*Potentilla indica* (Andrews) Th.Wolf



ヘビイチゴは田んぼの畔や空き地など明るい所に生えるのに対し、本種は林縁などやや影があるような所を好んで生えます。ヘビイチゴよりも大型で、葉の色も濃いです。

### (3) オヘビイチゴ *Potentilla anemonifolia* Lehm.



上記の2種が小葉が3枚であるのに対し、本種は5枚なので簡単に見分けられます。空き地や休耕田などで普通に見られます。早春に黄色い花をにぎやかに咲かせます。果実はほとんど発達しないのでイチゴらしくは見えません。

### (4) ヤナギイチゴ *Debregeasia orientalis* C.J.Chen



これまで紹介してきたオランダイチゴ属、キイチゴ属、キジムシロ属はすべてバラ科でした。ところが本種だけがバラ科ではなくなんとイラクサ科なのです。果実がイチゴに似ているためにこの名がつけられました。もちろん食べられます。低木で、葉がヤナギを思わせることからこの名があります。沿岸地域に普通に生えます。